

## 一般演題 2-6

## 琉球大学医学部附属病院における高気圧酸素治療圧力と治療時間の変遷

上江洲安之<sup>1)</sup> 砂川昌秀<sup>1)</sup> 合志勝子<sup>1)</sup>  
 當銘保則<sup>1)</sup> 野原 敦<sup>2)</sup> 井上 治<sup>1, 3)</sup>  
 合志清隆<sup>1)</sup>

- 1) 琉球大学医学部附属病院 高気圧治療部  
 2) 鈴鹿医療科学大学  
 3) 江洲整形外科クリニック

## 【目的】

琉球大学医学部附属病院の1985年から2014年までの第2種治療装置による高気圧酸素治療 (HBO) プロフィールとその変遷について報告する。

## 【結果】

第2種治療装置の年間稼働回数は1985年から2009年では年間約500回前後であり、1日の装置稼働回数は平均1.9回であった。2010年の稼働件数は増加しており年平均900回ほどで、1日の稼働も3.5回になっている(図1)。1日の治療数は一部の急性疾患に対して日に2, 3回のHBOを行うことはあったが、2012年からは急性疾患に限らず慢性疾患においても、主に在院日数の短縮を目的に日に2回のHBOを施行している。次いで、治療圧では1985年から1995年における当院の標準的な治療圧は、難治性潰瘍や骨髄炎などの慢性疾患に対し2.0ATAの60分間のHBOを主に用い、術後血行障害やガス壊疽、イレウスなどの急性疾患に対して2.4~2.8ATAで60分間を超えるHBOを用いた。その後、HBO国際会議における意見交換や患者治療圧力の多様化に対応するために、1996年より2.5ATA、60分間のHBOを慢性疾患治療に追加した。1999年から急性期疾患に用いていた2.8ATAで60分間のHBOを各疾患患者に対して段階的に試行し、安全性と急変時対応の確認作業を経て慢性疾患においても2.8ATA、60分間のHBOを「標準治療」とした。しかし、2012年からは2.4ATAで日に2回のHBOを積極的に取り入れ現在に至っている(図2)。

## 【考察】

国際的にも標準的なHBOのプロフィールと治療回数は定まったものは無く、これらは各国ないし各施設に



図1 治療装置の年間稼働回数

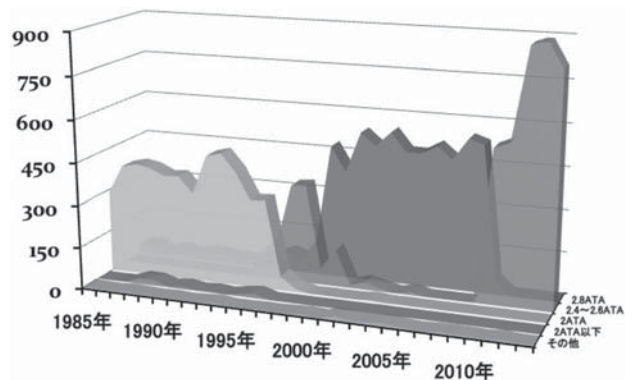


図2 高気圧酸素治療圧力の変遷

よっても異なっている。当施設では2.4ATAの60分間を標準治療としているが、治療効果への対処が求められるなかで、患者や疾患によっては日に2回の治療を1つの標準治療としている。患者数ないし治療件数の増加は、少ない医療スタッフによる管理体制の難しさに加えて専任医師の治療装置内業務が増えるといった課題がある。さらに、第2種治療装置は集団治療であり、患者の疾患ごと治療プロトコルを変えることは困難である。以上の状況を踏まえると、一部の疾患を除き、治療圧力2.4ATAを統一した日に複数回のHBOは、急性期疾患や難治性患者において有効性の判断が明瞭になり、しかも早期に可能となっている。この治療プロトコルは患者の振り分け作業が軽減されるだけでなく、病院管理面での運用が容易になり、1つの治療モデルとして推奨されると考えられる。